

# 平成30年度 松山管内生徒指導夏季研修会 実施報告書

## 講演内容

- ・演題 学年・学校・中学校区の状況に応じた不登校の取組を考える

2つのチーム学校と「継続数」「新規数」

- ・講師 文部科学省 国立教育政策研究所

生徒指導・進路指導研究センター 総括研究官 中野 澄 氏

## 1 不登校対策 2つの視点

○教員の同僚性を生かした取組

○他職種の連携・分担による取組

(1) 「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」

① 経験の中に補助線を入れる。

② 多面的に見る。分かっていることを違うところから見る。

③ キーワードは、「2つのチーム学校」「新規数と継続数」

④ 生徒指導がうまく回っているときは予算が付かない。何かあったときに予算が付く。一番良いのは、教員を増やすことだと思うが、そうはならない。教員だけという世界には不信感があり、教員とは違う価値観を持つ人を入れていけば良いということになる。したがって、SCやSSWを入れた方が良いという考えになる。

⑤ 多忙感やいじめが背景であるため、いくらSCやSSWがいたとしても不登校は防げない。

⑥ 大事に至らなかったことも多い。防いでいる事例は、公にならない。それは個人情報だから。

⑦ もう一度、「同僚性」は何かを考えていくことが大切である。(図1)

(2) 「継続数」と「新規数」

① 不登校の急増を防ぐことに力を入れる。小6から中1が急増している。そのため、小中連携が必要である。

② 中3になると落ち着くのは、進路が関わってくるからである。



## 【資料提供】 NIER 国立教育政策研究所

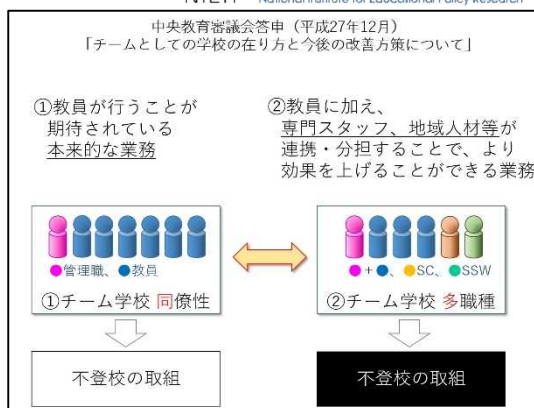


図1



図2

- ③ 内訳を見てみると、毎年学校に復帰している児童生徒はいる。
- ④ 継続数に着目すると、不登校だった子どもに丁寧に関わることになる。(ケース会議等) 欠席日数が0になるかという、0にはならない。
- ⑤ 不登校を減らしても、中2・中3でも不登校は出てくる。中3でも進路があるのに中1と同じくらい不登校は出ている。不登校が同じように出てくるのは、中学校の課題である。
- ⑥ 昨年度学校に来ていた子どもを、今年度も続けて来させる。新規数に着目する。(図2～図4)

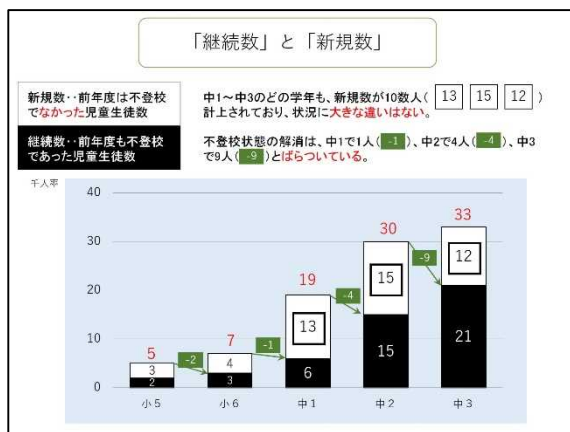


図3

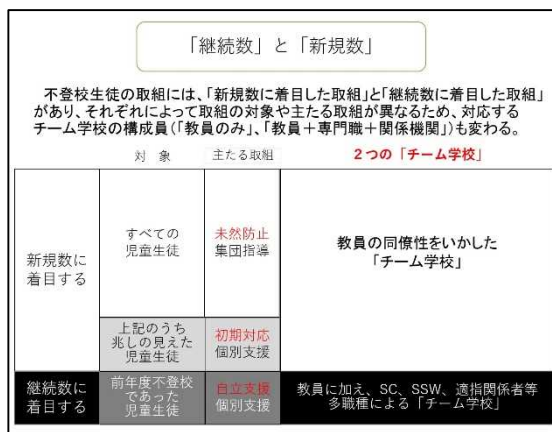


図4

- ⑦ 未然防止とは、不登校の兆しを見せないようにすることである。
- ⑧ 昨年来ていたのになぜ来られなくなったのか。それは、「学力」と「友人関係」が原因である。不登校になった子どもにとって、この2つは難しい問題である。しかし、学校に来ている子どもに「なぜ学校に来ているのか」を聞いても、その理由は「学力」と「友人関係」である。嫌なことがあっても、この2つが安定していると学校に来ることができる。
- ⑨ 子どもの期待に学年団の教師が応えているから、子どもが学校に来ている。
- ⑩ 教員の同僚性を生かした「チーム学校」には、新しいものを取り入れなくてもよい。
- ⑪ 自信が過信になることは防がなければならない。過信になっていないか振り返る必要がある。
- ⑫ 図5を見ると、A中学校3年生では、新たな不登校が少なく、今までのことを続けていけば良いことが分かる。課題は、小学校6年生のときの不登校がそのままになっていることである。机はいつも端の方になっていないか、プリントは配られたまま、そのままになっていることが当たり前になっていないか、専門家を入れてケース会議をする必要がないか。

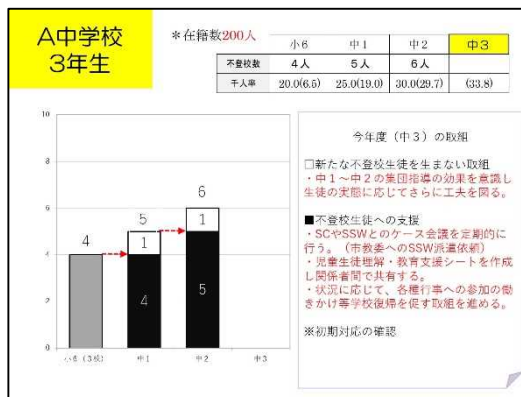


図5

⑬ 図6を見ると、B中学校3年生では、中1で急激に増えている。小学校の時に何かサインがあったのではないか。6年生のときに何日休んでいたかを聞く必要がある。

⑭ 継続数が多ければ、SCやSSWが関わる必要がある。

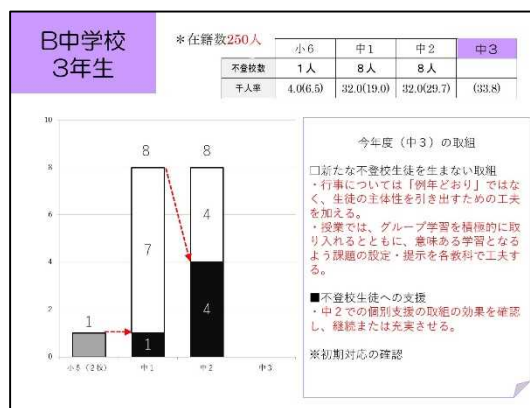


図6

## 2 新規数抑制に向けたシステムの提案

○教員の同僚性を生かした「魅力ある学校づくり」の推進

(1) 「魅力ある学校づくり調査研究事業」の目的  
「取組が本当に児童生徒の多くに届いているのか」、自信が過信になっていないか、自ら点検することが大切である。

(2) 事業の経過…不登校新規数を抑制  
意識調査を年3回実施する。少なくとも学期ごとに行うことが大切である。(図7)

(3) 指定地域共通での取組

① 3月に全小中学校で意識調査を実施した。3月にすることは嫌がられた。しかし、最初に取りっておかないとプランは立てられない。

② すべての児童生徒からのメッセージだと教師が受け止めるようになる。

③ 子どもの声に気付かせるアプローチである。

(4) 意識調査は「教員の共通理解」のツール

① ア～エでプランを立てる。少なすぎると思うかもしれないが、たくさん聞くのは研究者のデータである。研究者は目の前に子どもがいない。(図8)

② 4項目だとクロス集計ができない。

③ 自分たちの見積もりと明らかに差があるところを話し合う。

④ こだわる項目を1つか2つに決める。

(5) 意識調査の結果に基づく課題分析・目標設定・取組計画設定

1つ決めたらそれだけをする、学年としてどれをするか1つだけ決めることが大切である。

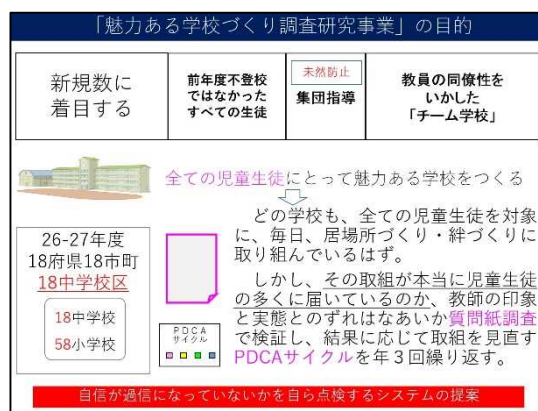


図7

意識調査

教員が共通理解をすべきこと

なぜ、ア～エで、課題を分析し、目標を設定するのか。  
意識調査は何を教えてくれるのか。



- ア 学校が楽しい
- イ みんなで何かをすることは楽しい
- ウ 授業に主体的に取り組んでいる
- エ 授業がよくわかる
- オ 叩かれたり、けられたり、強く押されたりした(暴力を受けた)
- カ 暴力ではないが、いじわるをされたり、いやな思いをさせられた
- キ 叩いたり、けったり、強く押したりした(暴力をふるった)
- ク 暴力ではないが、いじわるをししたり、いやな思いをさせた

- 4件法
- 1 あてはまる
  - 2 どちらかといえば あてはまる
  - 3 どちらかといえば あてはまらない
  - 4 あてはまらない

図8

(6) 意識調査のどこに注目するか

- ① 「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた8割を捨てて、残りの2割を変えよう  
と対応するのは、子どものメッセージとずれる。
- ② 目標を決めること、達成することはあまり大きな問題ではない。大切なのは心意気である。
- ③ 「当てはまらない」と答えた4%には、個別支援をしなければならない。(図9)

(7) 取組の浸透度

目立つ子どもばかり声を掛けたり、個々に対してターゲットを絞ったりして、取りこぼしが続くと、本当の荒れが起こる。その他大勢の子どもを取りこぼしていないかを振り返ることが未然防止につながる。

(8) 調査結果に基づく取組の点検と今後の取組内容の見直し

(9) 点検と見直しの視点

- ① 『全ての児童生徒の「心の居場所」となる学校』をしっかりとすると、「絆づくり」になるだろうと思うのは、大きな間違いである。(図10)

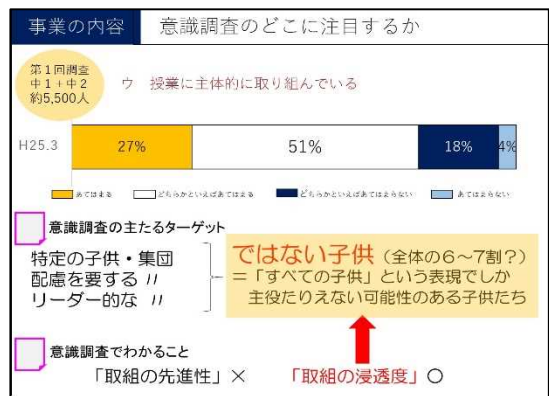


図9

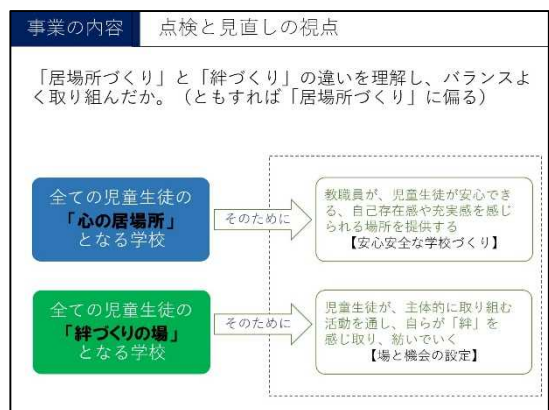


図10

- ② 自転車のスポーク（全ての児童生徒の「心の居場所」となる学校）から、タイヤ（全ての児童生徒の「絆づくりの場」となる学校）になるように、先生が入れ替わっても崩れない、先生がいなくても自分たちでやっていけるようにしていかなければならない。

(10) まとめ

- ① 教師・SC・SSWとは、グー・チョキ・パーのあいこじゃんけんである。
- ② 教師の同僚性とは、みんながグーを出すあいこじゃんけんである。

(11) 意識調査の推移から見る…いじめの被害・加害の実態

- ① 未然防止に焦点を当てた取組は、不登校の多い学校にも少ない学校にも効果がある。それは、不登校を減らすためだけの取組になっていないから。
- ② 自信が過信になっていないかを振り返る取組をして欲しい。

### 3 振り返り

- (1) 初期対応は未然防止ではない。
- (2) 教師の同僚性を生かして、その他大勢を視野に入れながら、絆づくりを繰り返し進めていくことが大切である。